昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十八年十月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第一七四号）

慈光

第十五巻　第十号

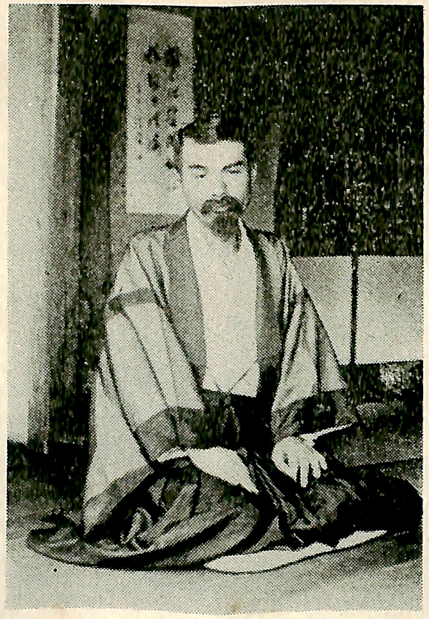
目次

絶対他力と体験……池山栄吉…（1）
池山先生を憶う……花田正夫…（7）
求道硯滴……福島政雄…（12）
『教行信証』信楽釈……近角常観…（15）

63.7.6

絶対他力と体験

池山栄吉



大正十二年夏　岡山時代の先生

厄年に命終して

私が、わたくし一人のための本願のかたじけなさに、念仏の申されるようになつたのは、あの「親鸞におきてはただ念仏して云々」の文を通してであつた。忘れもしない四十二の秋、陰惨な空虚に閉じられた胸の中に、ひよつこりうかんだこの文にひきつけられて、じつと思をひそめた刹那であつた。

眞宗贔屓

一体私は幼少の時分、時々説教などをきかされて、子供ながらも真宗の意趣はほぼ聞きわけたように覚えて、金色燦爛たる仏檀に向つて合掌する折などは、一種ありがたいような感じにうたれたこともあつたが、長じて中学程度の教育をうける頃には、ただ真宗贔屓の気分がまだ幾分か残つていたばかりで、信仰の萌芽とも見えるものは、全くその影をひそめてしまつていたのであつた。

が、二十五六の頃からであつたとおもう。ききおぼえの教理を現実生活の上にあてはめて考察する傾向が起つて来

て、その結果、自分で自分の心相を観察する、所謂反省の念が、年をおうてだん〳〵とこうじていくにつれて、ますます真宗の実諦が深く味われるようになり、なるほどこれでなくては駄目だな、とまで思いこむほどになつた。

二十八九の頃、近角君としりあいになつて、それからこのかたずつと親交のつづけられたのは、信仰促進の一大要因となつたことはあらそえない。

社会事業の経営

三十三のとしであつた。経常費を寄附に仰がずに、労働階級の便益をはかる社会事業を経営しようと思い立つて、その財源にあてるため、或商売をはじめたが、結局失敗に終つて、目的の社会事業の方には、一指を染める余裕もなく、二年の後、さらにあらたなる方面から着手すべく、心ひそかに期するところがあつて、生れ故郷の東京を去つたのであつたが、これが深刻な省察を自分の心に加える上に甚大なききめがあつたとは、あとから思いあわされたのであつた。

岡山へ隠棲

心に描いた新計画も、幸か不幸か、いろいろの事情にさまたげられてまだ手の着かないうちに、心ならずも大阪の寓居から再転して、岡山に落付くこととなつたのは、東京を出る前からの二年ごしの病患に、ようよう運動の自由を恢復した三十五歳秋の暮、紅葉もなかば散り失せた頃であつた。

岡山へ来た頃は、信者をもつて人も許し、自らも任じていたので、仏教青年会などで話をさせられたこともあつたが、今更おもえば忸怩の感にたえない。

口に出にくい念仏

当時信者をもつて任じていた私に、われながら合点のいかないことがあつた。それはどうも念仏が口に出にくいことなのであつた。第一人前で念仏を称えるのは、なにかきまりがわるいような気がした。それでも称えなければ、まずいような場合には、仕方なしに僅に唇の動く程度で、口中で称えるにとどまつた。

こうした態度は、自分にも甚だ面白く思えなかつたので、どうかもつと頻々と念仏の出るようにする方策はないかとだんだん工夫をこらしたすえ、日頃口癖になつていた唱歌のかわりに、念仏を称える癖をつけようと心掛けたことさえあつた。おかしな話だが、当人はすこぶる真面目であつただけ、まことにいじらしい喜劇であり、滑稽な悲惨であつたのだ。

仏様の隠見

それから今一つ。それこそ本当によわつたことは、信仰の対象である肝腎の仏様が、時としてはたしかにあるに違いないと思われ、時としては疑もなく無いように思われたことであつた。螢の光なら明滅はあつてもあやしむにおよばないが、尽十方無碍光の正体が、有明海にあらわれるときく不知火と一般、若存若亡ときたのだから心細い感なきを得ずであつた。

自歎

何かすこし好い事でもあるとか、人と信仰談を交わしたとかいう折は、仏陀の救済を前提として、しきりに感謝と慚愧の念が催されたものだつたが、世事にまぎれて法縁に遠ざかるか、ちと思わしくないことが続いて起りでもしようものなら、さつぱり悦べなくなるばかりか、さきに悦べたことまで、結局、また例の空想の織り出した幻影にだまされていたのだな、と断定しないではいられなくなつて、玉手箱を開いた浦島ではないが、希望は一抹の煙と消えて残るは灰色の淋しさばかり、となつてしまうのが定であつた。

他力の辨証

深い罪は重い苦をまねく。煩悩熾盛の自分が、苦毒に身をこがすのは自業自得だ。それだのに、自分は現在さほど劇しい責苦にあつているでもない、かえつて随分おもしろい目に逢うこともあるし、甘い希望に酔わされることもある。これはなんでも自分の背負つてる業の重荷の外に、自分をかばつてくれる或力がそわつているに違いない。その力こそ即ち他力だ、仏の加威力でなくてなんだ。

私は当時、こう自分も考え、人にも話したものだ。が、その実、陰では、その仏が出たり引込んだりしていたのだから、その心苦しさといつたらなかつた。

群盲評象

ひるがえつて思えば、私達の分別で、如来の存在をたしかめようとするのは、群盲の象を評するよりおろかなことだ。「如来の智慧海は、深広にして涯底なし、二乗の測るところにあらず。唯仏のみ独り明に悟りたまえり」唯仏与仏の智見なる涅槃寂静の境界は、煩悩の雲のかかつてる私達の眼に見えようはずがない。凡夫散乱の心水に、如来常住の相のうつる可能性は、如来からたまわる信心一つにかかつているのだ。

自作の本尊

淋しさにたよりを求めるが、そのたよりとするところが

自分の思惑ででつちあげたものなのだから、心の動きようひとつで直きにこわれる。やる瀬なさにまたたよりを求めにかかる。月が満ちたり欠けたりする変化に似て、時々刻々の気分次第で明暗の間に彷徨して、落付いたやすらかさのない年月を送り迎えたのも幾たびか。一方地味な教職に従事しつつ、清閑な日暮しをして行く間には、過ぎこしかたを顧みて、社会事業の経営に憂身をやつしていた当時の心の相を思い浮べる折もあつて、我ながらその浅間しさに呆れられることもあつた。

窮通

表面静かな生活のうちにも、ゆるみなく攻めよせる大小さまざまの憂悩に対して、苦闘のやまる時はなかつた。それが遂にある内的の実際問題に引掴まつて、ウンと首根子を押えられ、動きのとれない破目におちいつたと思つたら何ぞはからん、それこそ本当に救の御手に抱きとられる時尅の極速となつたのであつた。

さてその問題とは何であつたかというと、つまり実践道徳の見地からする自己批判で、放縦な欲求をあくまでとおそうと気張る強烈な熱情と、それをおさえつけようとして渾身の力を絞つても、却つてそれにはねかえされる無力な良心との闘争なのであつた。

勿論こうした問題は、何もその時にはじまつたのではない、いつも起こりつゝあつたのだが、これが時節の到来というものであつたか、この時に限つてとりわけ痛切な感にとらえられたのであつた。

放恣と良心

問題は深刻ではあつたが、簡単なものだつたので、かりにもそんなことを思うとは何事ぞと、百も承知の自分を叱つて、これからは断然思うまい、すまいとしたが、さて出来ない。入梅の季節に、着物や煙草が湿つぽくなるように煩悩の霖雨に惑染した心には、おのずからにじみでて、思われるものは思わずにはいられない。いくら思うなと厳命したところで、自分の心が自分の命令を奉じようとしない。否、奉じようと思つても実際出来ない。癪を起した人がいくらのけぞるまいと思つても、病がこうじると、のけぞらずにはいられないように、良心の方てしきりに命令を連発して、たつて抑えつけようとかゝると、相手の方はせせら笑つて、ヘンそんなことで引込むような俺だと思つてるかと、啖呵をきつて居直つてしまう。が、その実それが気になつてたまらない。

強情我慢な心にも、良心の呵責は感ぜずには居られないのだ、こうした頽廃の心状が、以下に述べるような次第で私の処世の方針に至大の影響を及ぼして、ひいては私の生

活の基礎をくつがえすたねとなり、再転して新なる生活の基礎の定まる縁となつたのだから不思議なものだ。

功名を追つて

一体私は若かつたときに――今でも矢張りそうかもしれないが――より大事なものは名誉であつた。名誉は私のあこがれであり、私の行動のテコであつた。

外界が思うようにならないまでも、内界を支配する気力の充実を感知していた間は、万難を排しても所志を遂行して見せるという意気込があつて「憂きことのなおこのうえにつもれかし限りある身の力ためさん」といつたような、一種悲壮な美感をさえ抱いたものだつたが、今現に自分が外界を支配することの出来ないばかりか、内界の支配者として、わが心を左右することすら出来ないのだ、と自認しなければならない段になつて見ると、何はさておき、自分は自分の生命とする名誉を得るに値しない。何故ならば、名誉の主体となるべき人格そのものが駄目だからだ、と認めなければならなくなつた。

虚名と絶望

値の実を欠く名誉は虚名だ。それと知つては、いかに名誉を博したところで、どう満足が出来よう。希望の青い色はあせて、単調な灰色が絶望の目に見える物みなをつつんだ。

こうした味気ない世の中に、このさき何を目当に生きのびたものか、夜道を辿る旅人が目標とした灯火を見失つたように、茫然として途方にくれざるを得ないのであつた。

眞信の願求

名誉どころの騒ではない。おのれとつくる罪の重みに、何処まで落込んで行くことやら。如法の暗夜に荒れ狂う大海の波にゆりあげられ、ふりおとされて、浮きつ沈みつ漂いながら、救いを呼ぶべき方角すらもわからなかつた私は叫んだ。あゝ、こういう時に真実の光明が見えていたらと。

私はこの願望に引きずられた。そして何処かに影はさしていないかと、心のひとみをこらしてあたりを隈なく見つめたのであつた。

よきひとのおおせ

この時であつた、かの歎異鈔の「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰をこうむりて信ずるほかに別の仔細なきなり」という文がひよつこり胸にうかんだのは。

私はぐつと引寄せられた。そして息をこらし思いをひそめた。その刹那、忽然として心の奥にひらめくものがあつ

た。そうだ！とわれとわが心にうなずいて「親鸞」とあるのを「私」と置いて「よき人」とあるのを「親鸞」と読んだ。そしてかの文を口の中で繰り返したかと思つた途端、まるで千仞の堤がきれたかのように、思わず知らず念仏がドツと口をついて出たのであつた。高らかに、淀みなく。

動かぬ信の味

光明は見えた。夜は明けた。たしかに救の綱が手に触れた。思えば長い迷路のさまよいであつた。

今の今まで心を閉ざしていた淋しさ、はかなさ、味気なさは、一声一声の念仏にかき消されて、それといれかわりに、たのもしさ、ありがたさ、よろこばしさが、潮のさすように心にみちわたるのを覚えた。

そしてこれが動かぬ信の味だな、ということは、この時はじめて思い知られたのであつた。

南無阿弥陀仏

この心的実験があつてからは、最早仏様が出たり引込んだりすることもなくなつたし、寒い朝に冷水摩擦をする位思い切らないでは口に出なかつた念仏も、やす〳〵と称えられるようになつた。

歎異鈔が苦もなく度々読めるようになつたのもこの時からであつた。そして、これまで信仰の対象だつた唯の仏陀が、阿弥陀の御名を冠せられたのも、実にこの時からであつた。

無碍の一道

西方寂静無為のみやこに志して、歩をはこんだ私が、始めのほどは彼方に名勝をさぐり、こなたに旧跡をたずねるなど、のんきな旅行気分にふけつていたが、とうとう、断悪修善の曠野に行詰つて、手も足も出なくなつてしまつたおりから、よき人、親鸞聖人の声に聞いて、心機一転、大悲選択の願心に信順し、活路を無碍の一道に見出して、念仏成仏する身の上となつた。これが私自身の「二河白道」の体験だ。

ただ不思議

「慶しい哉、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法界に流す」

聖人の慶歎そのままを頂いて、満腔の感謝を表する辞としたい。おもえば〳〵ただ不思議という外はない。どうしてこの疑い深い私が、絶対他力を信じないではいられないようになつたのだろう。

（絶対他力と体験より抄出）

池山先生を憶う

花田正夫

本年も先生の廿六回の忌日が近づきました。十月廿七日の日曜に、京都西山の浄住寺で有縁の人々が相集つて、御遺徳をしのび、高恩を謝すことになりました。

先生のお好きだつた白萩を八橋の鈴木さんから貰つて、庭の隅に移し植えましたのが、この秋も見事に咲き乱れております。この花がやがて散つて、黄色に紅葉する頃、先生は洛北蓮華谷の地で念仏の息絶え終られたのであります。

わが庭の萩さかりなり　ここかしこ
白き孔雀の　むれいるがごと

の御遺詠もしきりに心に去来いたします。

ただ念仏して

さて先生の思出はつきませぬが、何と申しましても、先生のおいのち、真面目は、

「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」

の御文にはじまり、そこに輝き、そこに満ちたりて、きわまつて居ります。

そして有縁の人々に

「池山におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひと親鸞聖人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なりなり」

であると、繰り返し／＼御自督をおのべ下さつて、

「聖人もそうせられたのか、じや池山も、南無……」

と御身にかけられて、私共に信界への踏み切りをうながされました。

そこには、先生が聖人の中に没入していられ、聖人が先生にあらわれて、一味の徳光を拝しました。たとえて申しますと、完全日蝕の刹那、太陽の中に月が没して、周囲に光焔銀霧があらわれる趣がありました。

この先生の悲心あふれる慈言に促されて、

「私におきては、ただ念仏して……」

と、信界への踏み切りを体得せられた人々は多いことでありましたし、先生亡き現在も、そのことは続いて居ります。

さて、先生の御晩年に

「ただ念仏して、という言葉は、聖人のよき人の仰せに聞いたきわみであり、信の告白としてのかなめであり、また人に信をすすめるおくのでもある、」

と申されました。

最初に、よき人の仰せのきわみ、とありますことについて申し添えましよう。

まず、ただ念仏して、の、念仏してについて思いあたりますのが、善導大師の「称名念仏」のお勧めであります。

大師以前の仏教の学者達は、観念の念仏を尊しとして、称名は軽視するのが常でありました。そうした時代にあたり、大師独り観無量寿経の玄意をもとめられて、極重悪人の救済は「称無量寿仏」にありと見定められたのであります。とくに下品下生という十悪五逆の愚痴無智の者の臨終にあたつて、善知識があらわれて、仏徳の不思議をとき、仏を心に念ぜよと勧めますが、罪人は、病苦と罪苦の一切が死にのぞんであびせかかつて、ただ苦しい／＼の一杯で

「私は苦に迫られて、心は苦にとらえられ、仏を念ずることが出来ません」

と訴えますと、よき人が、

「もし心に念ずることが出来ねば、口にただ無量寿仏を称えよ」

と勧めますと、それにつれて、南無阿弥陀仏を十声称えて生命が終り、浄土に生れるのであります。

大師はここに凡夫往生の道を見出され、同時に、御自身の救いの光を頂かれて、「称名念仏」ひとつを御勧め下さつたのであります。

大師は更に、大無量寿経の中心の本願を

「若し我成仏せんに、十方の衆生、わが名号を称して、下十声に至らん。若し生れずば正覚を取らじ。彼の仏今現在成仏したもう。まさに本誓重願のむなしからざるを知るべし。衆生称念すれば必ず往生を得るなり」

と、大悲の称名一つと信嘗せられました。

次に「ただ念仏して」の、ただ、に着想いたします時、そこに「専修念仏」とお勧め下さる法然聖人の仰せがきこえるのであります。「ただというは、そのことひとつという、ふたつならぶことをきろうなり」と親鸞聖人も仰せられましたが、これが専修のこころであります。

法然聖人の有名な三選の文に

「速に生死を離れようとおもえば、しばらく聖道門をさしおいて、えらんで浄土門に入れ。浄土門に入ろうとおもえば、しばらく雑行をなげすてて、選んで正行に帰せよ。正行を修しようとおもえば、なお助業をかたわらにして、選んで正定を専にせよ。正定の業

とは、即ちこれ「仏の名を称するなり」、名を称すれば、必ず浄土に生れることが出来る、それは仏の本願によるからである」

と、あらゆる世間の非難と迫害をこえられて、専修念仏の一道に凡夫の救済の存することを明らかにせられたのであります。

然しこのように思いきつて念仏の本義を明らかにせられたのも、聖人の幼時、父君の横死と遺言により、叡山にのぼられ、一切経を五回も読破され、またあらゆる修行にはげまれた末、「我智くらく、我機及び難し」と四十三の春大疑団に逢着せられました。「渡るに舟を失いたるが如く闇に道に迷う如し」とはその時の悲歎の声のきわみでありました。その時、幸に源信僧都の往生要集に導かれ、善導大師の観経疏によられて、

「一心専念弥陀名号……順彼仏願故」

の一文に引きつけられて、忽然とひらけ、

「余が如き下機（愚痴十悪の者）の行法は、阿弥陀仏、法蔵因位の昔、かねて定めおかるるをや」

と落涙千行万行の中に、専修念仏門に入られたのであります。聖人の御臨末の近い日、御廟についておたずね申すと「そうしたものは無用である。念仏の声のするところ、たとえ賤が伏屋であろうとも、そこにわが廟所がある」と遺訓していられます。

以上、ただ念仏しての一句に、法然、善導の両師の真髄がつくされ、そのままが、釈迦、諸仏の御本意にかない、弥陀仏の本願に相応するのであります。

第二に、信の告白のかなめ、とありますことについて申し添えましょう。

これは、歎異鈔の二章ですでに聖人が「愚身の信心におきてはかくの如し」と御自ら告白されて居ります。信の底を打ちあけて下さつて、それに加えることも減ずることもない、「かくの如し」、「別の子細なきなり」と言い切つて居られるのであります。

前記のように、善導、法然の両師は、称名念仏、専修念仏と、仏の玄意をお勧め下さいましたが、それをそのままよき人、法然聖人から面授口決をうけられた親鸞聖人は、「正信念仏」又は「念仏正信」とうけられたのであります

第三に、人に信をすすめるおくので、とあります点を申し添えましょう。

仏法では、自信教人信ということが鉄則であります。自信を欠く教人信は、盲が盲の手をとる迷妄であります。

然しここでよく注意せねばなりませんことは、自信は出来た今度は教人信だという風に、握りかえると、そこに雑毒におちこむのであります。自信のまんまが教人信であり、教人信がそのまんま自信におさまるのであります。

天親菩薩の浄土論にも「我一心に尽十方無碍光如来に帰命し、安楽国に願生したてまつる、」と申されつゝ最后には「普く諸の衆生と共に……」となつて居ります。

曇鸞大師の讃阿弥陀仏偈にも、「南無して心をいたし、帰命して西方阿弥陀仏を礼し奉る」とあつて、次に「願くば諸の衆生と共に安楽国に往生せん」と結んであります。

善導大師の往生礼讃も同一の規を踏んで居られます。ことに大師の「自ら信じ人に信を教うるは難の中うたた更にかたし」の金言は、万人の仰ぐところであります。

さて親鸞聖人におかれては、ことに、自信即教人信の妙趣が自然に建現されているのであります。有名な聖人の常持語「弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり云々」は、そのまま「わたし一人がためなりけり」と渇仰されるのであります。聖人の中に私の全体がおさめられとかされて、聖人が私、私が聖人と、一味に転成せられるのです。

月光が皎々と中天に輝く時、道行く人は提灯も電灯も無用であります。月明りに道はあきらかに照し出されるのですが、その月の光は、月が放つものではなく、太陽の光線の反射にすぎません。月が自体にうけた光の照りかえしであります。そのように、自信がそのまま教人信と照りかえして行くのは仏力の自然の催しであります。

さて、歎異抄の二章に見られますように、関東からはるばる、戦乱の世の身の危険をもかえりみないで京都の聖人をおたずねした同朋を前に、今生の再会を期し難い対面において、

「親鸞におきてはただ念仏して……よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」

と御自信を告白下さる、そのままが、関東の同朋をはじめとして七百年后の只今の私共に、

「私におきては、ただ念仏して……」

と、信界への踏み切りをうながされるのであり、私共はそこに引接せしめられるのであります。

鹿児島の故藤等影師は、「聖人のうしろむき姿の御教化」とよく申されましたが、まことによく言いあてられた言葉と思います。聖人は常に仏に向つていられるので、仏をうしろにして衆生に向つていられる時はありません。「親鸞は弟子一人ももたず候」とありますのも、「父母孝養のためにとて一ぺんにても念仏申したること候わず」との

御述懐も、皆々そうした趣であります。

聖人御自ら「いかにいとおしふびんと思うとも思うがごとくたすけ難ければこの慈悲始終なし」とも「小慈小悲もなき身にて有情利益は思うまじ」とも自力のはからいの駄目さを知りつくされたうえに、自他共に、如来の願力ひとつにすくわれて行くことを深信され「ただ念仏のみぞまことと」と信嘗せられているのであり、このまことなる念仏の大宝海から、無量無辺の徳光があふれているのであります。

こうした一切をふくめて、

「池山におきては、ただ念仏して……」

の一句を繰り返された先生でありました。廿六回忌の今日この「ただ念仏して」の中に先生を拝し、同時にまた「ただ念仏して」をもつて御礼を申す次第であります。

九月二十五日、稿す。

宮城道雄隨筆集より

修業中は馬鹿になつていなければ上達しない。馬鹿という言葉をいいかえれば、ものにこだわらない素直なことである。理屈つぽいのが一番修業のさまたげになる。

その次に戒めなければならないのは慢心である。高慢な気持が出たら、その人の芸はそこで止つてしまう。もちろん、自信は必要である。しかし、それは飽くまで謙遜の中の自信でなければならない。謙遜のブレーキのかからない自信はやがて慢心となる。慢心の出るのはまだ自分の芸が幼稚な証拠で、芸が進めば進むほど慢心はできなくなるものである。

眼の見える人は、職業の選択にも私共よりは自由が与えられている。自由は与えられているが、それだけに若い中は自分の現在いる地位や職業に不平不満をいだいて迷うことも多いと思う。その点は私共盲人はしあわせである、と言い得る。私達は、唯この道を往くより外はない。迷つたりする余地はない。ただまつしぐらにこの道を進んで往こう。この一念が私を今日あらしめてくれたとも言えるのである。

求道硯滴（2）

福島政雄

久遠の親

今年六月十六日の「朝日」に「父のこと」という題で亡き父親のことを書かれた記事があつた。八十一才で亡くなつた父親を四年後に追憶した文である。父親が生きていた間は自分は死というものに当面しているという感じがなかつたが、父が亡くなつて始めて死と自分との間に風通しがよくなりすつかり見晴しがきいて来ると書かれてある。

父というものは生きているというだけで、子供を立派にかばつてくれているということに遅ればせながら気付いた次第であると言われている。これを読んで私の父もそのとおりであつたと感ずる。父は最後の数ケ月神経痛で寝たままであつたが、私が夜おそく帰つた時もいつも「帰つたな」と言つてくれた。此の一言は忙しくしていた私を非常に元気つけてくれたのであつた。

それから「朝日」の記事で私の心に深く感ぜられたのは次の一節であつた。

父の死に依つて教わつた事がもう一つある。それは父が亡くなると同時に、父は私の中にはいり込んで生き出したということである。父の生きている時は少しも感じなかつたが、父に死なれてから、私は自分の中にいる父を感じ始めたのである。

これは深い意味のあることである。私は臼杵祖山先生から同じようなことを聴いたことがある。それは今から三十年も前で私がまだ広島にいた時のことである。浄宝寺というお寺で先生が法華経の長者窮子のお話をなされた。先生は親が死ぬれば親の全生命が子供の中に入る。子供が六人あつても十人あつてもその一人々々に親の全生命が入り込むのであるとお話しになつた。此のお話が私に深い感銘を与えた。私は母を亡くして十二三年、父を亡くして七八年の頃であつたが、此の時から親というものを本当に感ずるようになつた。四十余才になつて始めて親というものの本当の力を感ずるようになつたのであるから、実に遅いと言わねばならぬ。併し私にとつてはまことに有りがたいことであつた。

長者窮子の喩では、父親を捨てて長年の間他国に行つて、親があるということも忘れていた子を、親の方では片

時も忘れられないで、門の前を通りかかつた子を邸に引き入れまた長い間かかつて子の心を導き、死ぬる前に遂に親子の名のりをするのである。父は大福長者で立派な家屋敷や金銀財宝を沢山に持つていたが、死ぬる前に此の家邸財宝を皆その子に譲り渡すのである。臼杵先生は、これは喩であるから家邸金銀財宝というのは親の全生命のことである、喩では親が死ぬる前に子にゆずるのであるが、実際は親の死ぬると同時にその全生命が子のいのちに入るのであると仰せられた。

此のお話を聴いてから私は始めて親というものがわかるようになつた。そして親のいのちというものを身に感ずるようになつた。親のいのちは無限であると感じ始めた。生きていた時よりも私に親しくなり、歎異抄にあるとおり「尽十方の無碍の光明に一味にして」ということを親のいのちに感ずるようになつて、それは私のいのちと一流れであると感じているのである。

色々の点で親が生きていた時の姿や形がそのままに今の私の上にあらわれていると感ずることもある。「朝日」の記事ではまた次のようなことを言つてある。

父が生きていた時は、私は父とは少しも似ていないと思つていた。人もそう言うし、自分もそう信じていた。併し父が亡くなつたとたんから、私は自分の中に父がはいり込んでいて、それが時々顔を出すのを感ずる。

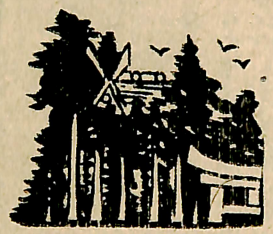
此のようなことは何処から来るのであろうか。私は法華経の寿量品のことを感ずる。生命の久遠化ということである。寿量品では釈尊の生命が久遠の生命であるということを徹底的に説かれてある。それは私にわかると思う。併し寿量品をよく味わつている間にこれは衆生の生命の上にも感じ得ることであると思うようになつた。それは科学的にも考え得ることであるが、寿量品の心を味わつて見れば親というものを外にしては久遠の生命ということはわからぬと思う。

親は此の世を去る時一筋にその子のことを思う。まだ独立の出来ない子が一人でもあれば親の思は殊に深くその子の上にそそがれる。そこには久遠のいのちの動きがある。それは釈尊の久遠のいのちのひびきであると私は感ずる。単なる科学の理論でなくて、温かい親の慈愛を身に受けている心の上では、久遠劫の過去から幾千万億の衆生を教化して下されたという釈尊のいのちのひびきを、私は直接には自分の親の上に感ずるのである。また自分の親を通して、久遠の親である釈尊を感じ、寿量品に深い感じを持つのである。

此の世で親に死なれるということは私どもにとつて最も悲しい淋しいことである。併し私の浅薄な心は、若し此の世の親を亡くするということが無かつたならば、此の人生の深みということがわからずに終るかも知れない。寿量品の医師の喩で父親である医師が、病気の子を救うために、良薬をあとに残して他国に行つて、使をやつて父は死んだと告げさせ、子どもはその良薬を服用することになるという、その良薬を飲むというのは久遠の親を信ずる心からであると思う。

久遠の親の生命は釈尊の御教によつて、常住に私のいのちにひびいている。しかもそれは私の亡き親のいのちを通してひびくのである。私は生れるから死ぬまで親のまことのいのちによつて補み育てられている。その事を忘れ勝である私を、亡き親のいのちは生きて、釈尊の御教によつて呼びさますのである。

（昭和三十八年九月二日稿）



明日は、明日こそは

ツルゲネフ詩

暮れ行く一日一日の何と空しく味気なく、甲斐ないものに見えることぞ。その残す跡形の何と乏しく、その一刻一刻の何と愚かしく無意味に流れ過ぎたことぞ。

でもなお、人は生きたいと望む。生を重んじ、希望を未来につなぐ。……ああ人は、どんな幸を未来にまつのであろうか。

一体なぜ人間は来るべき日々に、今しがた暮れたこの日に似ぬものの姿を、思い描こうとするのであろうか。いや人間は、そんな事は思い描きもしないのだ。人はもともと思考を好まない。そしてそれは賢明と言うべきだ「明日は、明日こそは」と、人はおのれを慰める。この「明日」が、彼を墓場に送り込むその日まで。

美辞

私は美辞をおそれさける。しかし美辞をおそれる心も、また一種の気取だ。

で、私達の生活の複雑さは、美辞と気取と、この二つの外来語のあいだを、行きつ戻りつする。

『教行信証』信楽釈

第八席（二）

近角常観

さてして見れば、その仏の広大なる浄土の大菩提心を頂くは何処であるか。問題はこれになつて来るのであります。即ち今言う如くに、我々には一つもまことの心無く、有るものは浅間しき根性ばかしである。而もその浅間しき根性があると云うだけにて、其儘じつと在られるものなら、まだよけれども、そのため流転輪廻止む時なく、日夜に地獄にだゞ走つて居る我々である。その我々の衰れなる迷いの様を御覧下されて、そのため法蔵菩薩が世自在主仏のみ前に於いて、超世無上の本願をお起し下されたのであります。親鸞聖人はこれを『教巻』に於いて、法蔵菩薩と仰言らず、直ぐ『弥陀誓いを超発して』とお示し下されてある。即ち法蔵菩薩は、久遠の阿弥陀仏が私を助けるために、態々現われ下されし御姿に外ならぬのであります。

で斯く阿弥陀仏、世自在主仏の御許に、法蔵菩薩と現れ、我々十方の衆生が、斯くの如く罪業に悩んで居る、これを如何にせんかと御覧下された時、広大なる大菩提心を起してあらゆる道を求め、行を修し、何うかして其の者を助けて遣りたい〳〵との、五劫思惟のあなたの念力より広大なる本願が起り、斯くの如き罪業の私を思召す遣る瀬なき御心より永劫の御苦労が現われ、其の結果が今日大悲の親様が、向うから私の浅間しき胸中を知り抜かせられ、その汝のために現在親が斯く汝を待ちかねて居るぞと、現に私に知らせて下さる、この利他真実の御呼び声である。で此の広大の親心に遇わせて頂くまでは、我々には善いも悪いも無いのである。有れば、有るものは悪しき根性ばかしなのであります。常に言う如く、我々の心に在るものは、人を疑い、隔てる心ばかし、そのために我々は日夜悩み苦しんで居るのである。で若し仏この者を御覧下されて「それではいかぬ」と仰せられるのなら、我々助かりようは無いのであるけれども、仏はこの者を「其の悪しき根性の止まぬ、それが可哀相で見て居られぬのである」と。……も一つ云えば、先より云う、自分の方から道を求める心を止めようたつて、それが止められぬ我々である。で聖人はこの自力根性を邪とお示し下された。自力他力を対にお示し下さる処になると、これを邪と言われてあるのであ

る。即ちいくら止めようと思うても、止められぬ処が我々の根性の邪である。

でこの者を仏御覧あつて「汝の道は間違つて居るから止めよ」と言つて下さるのみでは、我々は止まらぬのである。即ち先達からあれ程厳しく、言い過ぎると思う程言うても、殊勝病に罹つて居る人が、自分の殊勝振つて居ることに気づかぬ。何処までも自分の間違つた自力根性にが〻わつて居るから、気がつかぬのである。斯く間違つて居るから止めよ言われても止められず、放せと言われても放されぬ我々であるが、其の浅間しき根性を持ち、其の自力の計いに係わつて、人を疑い隔てて居る私を、他力の親様は御覧下されて

「如何にも浅間しく罪深き其の方であるが、我は汝の其の罪深くして見よう無き所が可哀想で、そのため汝が見捨てられぬのである。如何にも然う云う悪しき心が起るであろう、無理もない、如何にも色々苦しんでも分らぬであろう」……。存覚上人の『歎徳文』の中には

『定水をこらすといえども識浪しきりに動き、
心月を観ずといえども、妄雲なお覆う』

と云う御言葉が有つて、「その如く、何程一生懸命に求め苦しんでも分らぬ。その汝の煩悩具足の有様を、それが可哀想であると憐れむが、我が大悲の親心であるぞ。汝が得ようと自分の心を先立つる其の道では何程求めても他力の信心は頂かれぬぞ。『和讃』には、

定散諸機各別の　自力の三心ひるがえし
如来利他の信心に　通入せんとねがうべし

得ようと此方から欣求浄土を先立てるは、自力の三心であつて、これでは信心は頂かれぬ。で「我は、その悪しきして見よう無き自力根性の汝であることを知つて居る。知つたればこそそれが可哀想で堪えられぬ故、その者をどうかして〳〵と思う思いの積り〳〵て、今かく阿弥陀仏と現れ、一刻の猶予もなく、汝を救うという慈悲であるぞ」と。恰も溢るる流れが僅かなる隙を見つけて、堤を決し、遁れ去ろうとする如く、我々は自分の浅間しき根性から、計らい心の堤防を作り、お慈悲の水にかゝらぬよう、我と我が手で支えて居るのであるが、仏は其の私の剛慢の堤を、「それがあるのが弥々不便で見て居られぬのである」と向うの方より僅かなる隙を、求めて其の堤を打ち砕き、「何うにでもして、其の者にこの我が親心を届けねば措かぬ」と、如来無限の大悲が、其の僅かなる隙間より、此の私の心中に入り満ちて下さる広大の御哀れみなのであります。で前席申した『信楽釈』の処の初めのお言葉には、

『信楽と言うは、則ち是れ如来の満足大悲円融無碍の信心海なり。云々』

それ故、我々が信心頂くというは、我々の方より頂こうと手を出して頂くので無い、仏の方より是れ程までにやるせなく思召す、この仏の真実を聞かせて貰つてみれば、此方が有難うと頂かずには居られぬようになるのである。

私のような話し方をすれば、ひどく煩悶したり、又病気にでもなれば信仰が得られようなど思い易いのでありますけれども、此方が苦しんで信仰が得らるるので無い。向う様からの是れ程までの御親切で、此方が貰わずには居られぬようになるのである。それも貰おう〳〵と思うて貰うので無い。仏の方より「遣ろう〳〵」との御親切が私の身に迫り「是れ程までに親を心配させ、泣かせて置きながら、まだ〳〵頂けぬ、頂けるなどとは、何たる了見であるか」と迄言つて下さる、遣る瀬なき向うの御真実に打ち明かされて、此方が頂かなくてはならぬようになるのである。これが大悲の御催しで宿善開発するものであります。

故に宿善開発は、頂ける迄待ちて居れとのことではない。仏の方では一刻も早くこのお慈悲を届けよう、手懸りをつけようと、隙を見ては斯く常に私の方に言い詰めになし、又一切の諸仏は常に広長の舌相を出して、これを言いきかせて下されるのである。『阿弥陀経』に、

「汝等衆、当に是の不可思議功徳を称讃する一切諸仏に護念せらるるの経を信ずべし」

とある諸仏の称讃は、これに外ならぬのであります。

○

さて是れ程までに仏の方よりは言つて下されてあるのに、此方はけろりとして、これを受けることをせぬ。却つて此方より註文を出し「斯くして居る中に、仏のお慈悲は来て下されそうなものだ」など言つて居るのである。

親様の方は歯痒くてしようが無い。足ずりして「これ位迄言うに、すこしは我慢の根性を離れて、親の言う事を聞いてくれ」と言わるるのであります。

するとまたここで我々は「親様の方はそういう風に遣る瀬なく言つて下さるのだな」という風になり易いのである。斯くなる時は、親様と自分との間に襖一重の隔りが出来て来る。襖をへだて〻聞いて居るのでは何もならぬのであります。よくお慈悲の例に言わるる話に、越中の善六なる男が、親に夏「田に水を入れよ」と言われて、よい顔をしなかつた。今度は「汝何故行かぬか」と言われて、俄に不足そうなる顔をなし、急に家を飛び出して、反対の方角なる提の方に飛んで行く様子である。そこで親も心配して何処に行くのかと跡追うて飛んで行くに、計らんや河にはまつて死のうとする様子である。そこで親はびつくりして、小供の側にとんで行き、袖を捕えて「まあ待て」ととめるけれども、小供は親にあてつけであるから、容易に止

まろうとせぬ。親がつかまえて止めれば止める程「死ぬる〳〵」と振り放し、益々水に飛び込もうとする。遂にしまいには親の方が力尽き、親の方から頭を下げ「あゝ自分の方が言い過ぎであつた。自分の方が悪かつた。どうか許して、このまゝ家に帰つて呉れ」と、親の方から手をつかれて、初めて息子が帰つて行つたという話であります。即ち仏のお慈悲は、この如く、此方は仏を振り放して退けて行く者を、仏の方から言葉を穏かにし、引き戻して下さる広大の御衷れみであるというのである。

これはこの間の談話会の席にて、或方の喜ばれた一休上人の歌にも

極楽にさのみ用事はなけれども
弥陀をたすけにゆかざなるまい

これを聞いて私も非常に有難かつたのでありますけれども、併し、唯これだけであるのでは、私はどうも物足りぬ。ここにも一言附け加えねばならぬ事があるのであります。それは、成る程、親の方よりは斯の如く遣る瀬なく言つて下さる広大のお慈悲にて、誠に有難いのであるけれども、併し親の方より斯く言つて下さるのにて、此方は不精無性に帰つて行つたというだけにては、まだ真に親のそれ程までの御心労が頂けたのでは無いのである。

そうではなく、親が「汝水に入るなら、我も共に入る」とまで言うて下さる此の親の一言を聞いた時「あゝ今迄は知らなんだが、親はそれ程まで此の自分を思召して下さる広大の御親切であつたか。それでここまで自分を助けるために態々跡追うて来て下されたのであつたか、実に申訳ない」と、今迄飛び込もうとして居た子供が、其の親のやるせなき言葉に「実に相済まぬ」と頭が下つた一念に、初めて親の言葉のまに〳〵あとについて帰ることが出来るのである。これが『一念の信』なのであります。『和讃』には

若不生者のちかいゆえ　信楽まことに時いたり
一念慶喜するひとは、　往生かならずさだまりぬ

「汝がどうしても水に入るというなら、我も正覚の位は取らぬ、われが正覚の位を捨てゝ仏にならぬか。汝の方が助かるか、さあ何れであるか」と正覚の位を賭け物になされ、引きとめて下さる大悲の御心を聞く時は「親がそれ程に言われるから帰ろう」と、愚図々々あとについて帰るのでは無い。

法然聖人が、生涯およろこびなされた

若し我仏と成らんに、十方の衆生、我が名号を称えて下十声に至らん、若し生れずば正覚をとらず。彼の仏今現在に成仏したまえり。本誓、重願むなしからず、衆生称念すれば必ず往生を得。

の御文の通り、「あゝ有難や、南無阿弥陀仏々々々々」

と、其の遺る瀬なき親の御親切が胸に徹して、其の思召しの程に感泣して、今迄に親にそむいていた足を向け直して、あやまり〳〵親の許に帰るとなるのである。ここを私は力を入れて言いたいのであります。

若しここで親のそれほどのお心が貰えず「親がそれ程に言われるから帰ろう」では、又都合によると、河へ出かけようとなるのである。

然るに仏は「汝を其の儘水に入れる位ならば、我は何しに仏になろうや。既に正覚を成就し、仏と成りたる上は、一刻も汝を捨て置かぬ慈悲であるぞ」と。この遺る瀬なき御親切を承れば、「若不生者の誓いゆえ、信楽まことに時いたり」で「あゝそれ程までに、この親捨ての私を思召し下さる広大のお心であつたか、今迄長い間、実に私が悪しく御座りました、申訳が有りませぬ」と。今迄此方は長い間、親から遁れよう、反対の方角に行こう、として居たのである。

全体我々が今迄、道を求める〳〵と、仏の方角に向つて居ると思うて居たのが間違いにて、実は親と反対の方角に走つて居るのである。じやによりて、親は、其の者を引つつかまえ「どうかこの親心を聞いてくれ、頂いてくれ」と遺る瀬なく思召して下さるこのあなたの親心が、若不生者の御誓い、これが阿弥陀仏のお慈悲なのである。至心、信楽、欲生の三信ともいうも、至心は此の仏の遺る瀬なき御真実、其の真実は是れ程までに思うて下さる信楽の慈悲、その慈悲は極楽に生れんと欲え、と呼びて下さる、この遺る瀬なき仰せなのである。

故に次からお話する欲生釈の初めに於いては

『欲生と言うは、即ち如来諸有の群生を招喚したまうの勅命なり』

とある。而してこの「待つて居るから早く来よ」との仰せが、形にあらわれて南無阿弥陀仏の六字である。かく親が遺る瀬なき思召し一つより、我々が浅間しき様を御覧下され、其の者を助けよう〳〵と広大の本願を起し、長々御苦労御心配下されて、御待ちかね下さるというが、即ち本願の生起本末である。してその長々の御念力にて、遂にその広大の思召しが私の心に届いて下され、かく「長々申訳無かつた」と此方が折れて、仏に向つた一念が信心となるのであります。

○

で私は常に言うのでありますが、うつかりするとお慈悲の話が、本願や名号という事の説明になつていかぬのである。本願、名号というたとて、本願、名号という物が別にある訳でない。本願とて何も四角や三角の物柄でありはせ

ぬのである。本願とは、此のして見よう無き奴が可哀想で〳〵、飽くまで其の者を救わねば措かぬと思召し下さる、この親の御心の外に何もあらせぬのである、別に第十八願なるものがあると思うたら、間違いなのであります。

又南無阿弥陀仏の六字のいわれを聞きひらくとは、何か異つた珍らしき味いを感得することゝ、私も長く思うて居た。処が蓮如上人が仰せらるる南無阿弥陀仏のいわれとは、今言う遺る瀬なき親心が、直ぐに南無阿弥陀仏のいわれであつたのである。南無阿弥陀仏とは、親が斯くの如く我々のために御苦労下されて、我々が有難や南無阿弥陀仏と一念帰命する時、仏は「あゝ聞いて呉れたか、満足なるぞ」とその者を光明の中に摂取して下さるが阿弥陀仏と、唯これだけの事なのである。即ち蓮如上人『御文』の仰せは、仏が遺る瀬なく私に向うて下さる仏の御心の儘をお知らせ下されたに外ならぬのであります。なお申せば、かく我々に臨んで下さる仏のお姿が、……無論満足大悲のお姿がましますに違わぬも、其の御姿が何も冥想的に外界に求めて拝するのではない。斯く罪深き奴が見捨てられぬと、遺る瀬なき広大のお心一つより現われ下されしが、仏の御姿にて、其の広大のお心の儘が、即ちあなたの御姿にてましますのである。

又極楽の荘厳、七宝の樹林の一々の木の葉までが、此の私を可哀い〳〵との御心の外に意味はあらせぬのである。総て親のこさえて下された金銀財宝は、何もかも小供が可哀い〳〵との親心の外無いのである。故に南無阿弥陀仏を頂くといゝ、本願の生起本末を聞くと言い、信心を頂くと言うも、何も外に事があるのでは無い。この遺る瀬なきお心のありたけが、仏の御姿、名号、本願。この御心をきかせて貰つた処が聞其名号、即ち本願の生起本末を聞かせて頂いたものとなるのであります。

○

そこで前席に言い残した『涅槃経』の御文には

『又言わく、信に復二種有り。一には聞より生ず、二には思より生ず。是の人の信人、聞より生じて思より生ぜず、是の故に名けて「信不具足」と為す。復二種有り。一には道ありと信ず、二には得者を信ず。是の人の信心、唯道有りと信じて、都て得道の人有りと信ぜず、是を名けて「信不具足」と為す、と。已上抄出。』

今言う如くで、本願の生起本末を聞くというは、唯おおように耳で聞くのでない。本願の生起本末が明に私の心に届いて下された処が、真実の信心である。故にここの御言葉に

『信に復二種あり。一には聞より生ず、二には思より生ず。是の人の信心は聞よりして生じて、思より生ぜず、是の故に名けて信不具足と為す』

と、即ち南無阿弥陀仏の御謂れを、唯かくの如き法門として耳に聞いて喜んで居るだけでは、本当の信心で無い。それでは信なお不具足である。其の広大の御哀れみを真に心に頂き、そのお慈悲で中心から夜を明けさせて貰うた処で真実の信心となるのであります。又次に

『復二種有り。一には道ありと信ず、二には得者を信ず。是の人の信心は唯道有りと信じて、都すべて得道の人有りと信ぜず。是を名けて信不具足となす。』と

これは、他力の御教は、このして見よう無き私を、見捨て給わざる親様の広大の御思召し一つであつて、他にお慈悲の道なるものが存するので無い。それ故唯遣る瀬なきお慈悲の道が有る〳〵と喜んで居るだけで、肝腎の得道の大悲の親様の御親切が頂けぬことにおいては、其の人はまだ信不具足である。その広大の親様の御親切が頂けた処が、本当の信であるとの御示しであります。なおこの前に言うを忘れたのでありますが、も一つ『涅槃経』の御文がある。それは

『又言わく。或は説く、阿耨多羅三藐三菩提は信心を因と為す。この菩提の因また無量なりと雖も、若し信心を説けば則ち已に摂尽しぬ、と。已上』

これは阿耨多羅三藐三菩提を得させて頂くは、この遣る瀬なき大悲の有難やと頂く信心が因である、阿耨多羅三藐三菩提の因、実に無量であつて、様々あるけれども、此の信心頂けば、有りと有る万徳、皆この信心に具わる故、信心一つ説けば菩提の因みなこの中に摂尽さるゝとであります。

○

さて今席は何やら妙な席になり、殊に先程はつい〳〵角立てた事を申し、周囲にお聴き下された方は定めて有難く御聴き取り下された事と思いまするも、御当人には誠に申訳なき次第であります。かく甚だ無遠慮な事を申し、さぞや気持の悪しかつた事と思いまするも、どうか目の着け処を飜し、真実の御哀れみを頂きて欲しい、と思う事であります。

懺悔の序に申すのでありますが、全体私は常に皆さんから狭隘々々と言われる。「どうも近角の処に行くと、近角は狭隘で、一分一厘近角の欲する通りにせなければ気に入らぬ」と人から言われる。これは実に慚愧の至りで、私本来の我儘の性格が手伝つて居るものと、懺悔させて頂くことであります。

さりながら、私は本来斯る性質では無かつた。本来は非

常に遠慮深い性質で、決して人に言い過ぎなど出来なかつた。寧ろ当然言うべき正しき主張さえ、人に向つて口に出ぬという方の性質であつたのであります。

処がこのお慈悲を頂いてからは「何でもこのお慈悲一つを」という考えになつてからは、平日の言動のみならず、社会上、宗教上の実際問題に対してまでも、皆この無遠慮が出て来るのである。こは甚だ勿体無き事でありますけれども、専修専念、このお慈悲ばかりで無くてはと思う処からつい斯くなつて参るのであります。で若しや初めてお目にかかつた方で有ろうとも、……常にお目にかかつて居る方には無論のこと、このお慈悲一つをお聞き下さろうという方に対して、一見旧知の如く、充分の敬意を払つて思う様有難く話させて頂いて居る事である。

こは私個人としては、斯くの如く狭隘なるは、甚だ相済まぬ事であり、又不利益でもあるのでありますけれども、たとい如何に不利益であろうが、私自身が已前長くよい加減な事で遣りぞこなつて居つた事故、是非これば かりはどうあつても、充分に御伝え仕度いとなるのであります。

なお序に大に懺悔させて頂くことがあります。今度の会には、浅草婦人法話会の方が沢山お出で下さるのであるが、私は長らくこの法話会には出席しなかつたのでありま

す。これは、何故かと言うに、当初この会に出よとの御話が有つた時、私は「よい加減の聞きようをせらるる処へはいやである。聞くなら真剣に聞いて貰える処で無くては」と申して愚図つき、ついそれなりになり中絶えて居つたのである。これ私の今の狭隘の性質であります。

処がこの頃は四方八面、皆様が門を開いて、皆様の方からお出で下さる。実は私の方から心を開いて出て行きたいのであるけれど、私の浅間しき性分としてそれが出来ぬ。然るに斯く近頃は諸方面とも一時に開け、皆様の方よりかく御来聴下さるようになり、弥々申訳なかつたと懺悔させて頂く事であります。

実は「本当に聞いて呉るる処で無くては信心は駄目である。一生懸命に聞くようになるまでは出席せぬ」は甚だ宜しくない「あかぬから何時までも放つて置け」との仏の慈悲で無いのである。そのあかぬ者を何処までも言うて〳〵言い聞かせ、遁る者を引き捕えて、どうしても其の者に、この真実を届けねば措かぬとある広大の親様である。この点より言う時は、自分の関係ある学生諸君をはじめ、宗派、宗教界の人々に対し、有縁無縁を問わず、是非この広大の思召を充分聞いて頂かねば、相済まぬと思う事であります。然るに、第一、求道学舎と看板を掲げ、「道を求め度い者は進んでここへやつて来い」との態度が甚だ宜しく

ない。こは已前余りに遣り過ぎた結果、斯くなつたのでありますけれども、甚だ申訳ないことと懺悔させて頂く次第であります。

さりながら、不思議なる哉、私は一旦御縁のあつた方は設いどのような事をせられても、一人としてその人が捨てられぬ。設いそのために自分がどのような厄介、不利益を受けようとも、何うしても其人が離されぬ。勿論其の間に人間の貪欲、瞋恚、愚痴の念はあるのでありますも、其の間から、どうしても其人が捨てられぬ。これは皆様も必ずこうあるだろうと思うのであります。これが皆遣る瀬なき大悲の親様が、さきもあとも御存じの上にて、御導き下さるものにて、殊に私如き我慢な奴は、今言う漸次諸方面に御縁が熟し来るまで、何うしても此方の頭が下がらぬ。処が斯く諸方面に御縁が熟し来るにて「あゝ自分は冷淡なる奴であつた」と今更浅間しく懺悔させて貰う事であります。併し乍ら、親鸞聖人の『教行信証』に於いて、最も有難きは、真仮弁立という処に、最も力をお注ぎ下されてある事である。そのような具合に、手広くというよりも、一人にても真実の処を頂きて欲しいと思う処から、つい言葉が我慢になつて参り、甚だ申訳なき事であります。

夏期求道会、第五日第二席。

随想随感

聚墨生

老人の自殺

世界で一番福祉施設の発達しているスエーデンでなお老人の自殺者が多いということを聞かされます。そこに私は私なりに考えさせられることは、人間が生甲斐を見失う時、孤独地獄におちこむもので、いくら衣食住といつた外部の生活の支えが出来てもその人に「生甲斐」を失わないよう自他共に心掛けねばならぬと知らされます。

然しこの生甲斐も、外部の事情によつて転変するものであつてはなりません。それには先ず「三界に家なし」という自分の現実の心身の有様を徹見して、「三界に家なし」と呼びかけて下さる仏陀の慈悲の涙を仰ぐ時、そこに「如来の家」を恵まれるのであります。

たのまるるただ念仏の我にありさるべき業はさもあらばあれ　池山先生

三界に家なき身なりみ仏をたのみまつりて住み移り行く　福島先生

私はペンを持つた道具

リンカーンが米国の奴隷解放のために五ケ年の苦戦を続け、遂に成就した時、「アンクルトムスケビン」の著者、ストウ夫人を白亜館に招きました。それもリンカーンが苦戦におちた時、各方面から非常な援助をうけた原因のひとつに、ストウ夫人の著者、トムと云う奴隷の悲惨なそして美しい生涯を書いたこの書が、各地で愛読されそれによる共鳴者が多かつたからでありました。

さてストウ夫人の待つ応接間にあらわれたリンカーンは

「貴女ですか、これは驚いた。貴女のような弱々しい身体の方にあの万人の魂をゆり動かす力強い小説が出来たとは、不思議です……」

と呼びかけると、夫人は即座に

「それは誤解です。あれは私が書いたのではありません。悲惨な奴隷の生活の中に現れる神の御こころを書いたので、私は只、ペン持つた道具にすぎませんでした。私のような者が書いたもので、どうして皆様の心をうつものが出来ましようか……」

と答えました。そして夫人は、形をあらためて、

「私も驚きました。あのきびしい五ケ年間の戦闘が、あなたのようなやさしいおだやかな方によつて成し遂げられたとは」

と加えますとリンカーンは、

「私の場合も、貴女と同様で、私は神の一兵卒でありました」

と微笑の中にこたえました。

私はこの逸話を読んで、ストウ夫人の無私な姿に非常にこころがうたれました。

「人が若し真実なるものを見出したならば、われとしてなす何事もなく、ただ自分は、その真実から流れ出る光線の通路になるばかりである。」

と西哲も告げて居ります。孔夫子が「述べて作らず、集めて大成す」と、その書にしるしていられるのも、ここに通じるものでありましよう。

あとがき

足ばやに秋が訪ずれて来ました。紅葉の美しい浄住寺で一道会が催されます。今年も四国の松山から松本解雄さんが学生さんと共に御参加との由であります。私も是非年一度の大切な行事として御伺い申すことにして待ちに待つて居ります。

△本月号は、とくに他山先生のお原稿を、「絶対他力と体験」の中から頂きました。先生は大正七年に「独訳歎異抄」を亡き奥様の追悼出版、大正八年には「意訳歎異抄」を御母堂の追悼記念に出版せられました。次で大正十一年に「絶対他力と体験」を出版になさいました。

岡山から住吉に移られましたのが大正十二年で、昭和二年の夏に「信を行く旅人」更に京都に移られてから「仏と人」が出版されました。現在では、「仏と人」が丁子屋にあると思いますが、他は皆売切れて了いました。機を見て全集が出版されるよう祈念申して居ります。

△福島先生の「求道和滴」は、御多忙の中に、特に御恵送頂いて居ります。「求道不止」の御姿に、不法懈怠の心を引き立てて頂くことであります。

○

次に、彼岸の日、常滑市の山下先生から、「求道誌」の一巻から十二巻に及ぶもの、御大切に御保存下さつたものを御年八十四に及ばれ、散逸を畏れられまして、御恵贈頂きました。慈光誌に出来ます限り再録させて頂いて、近角先生の徳音を皆様方と共にお頒ち頂きたいと存じます。只事ならず、まことに有難い極みでありました。

又、仙台市阿刀田璋夫人から、矢張り八十四にもなられましたので、近角先生の御著書の一部を、御恵送下さる由を承わり、只不思議なことと瞑目、念仏させて頂いております。阿刀田先生は第二高等学校長として、仙台求道会の中心になつて下さつた方であります。仙台の空襲で御家も戦災をうけられましたのに、近角先生の御著書だけはのこり、形見として大切に保存されていたとの由であります。

○

池山先生の御写真は、大正十二年の夏、岡山の高等学校から、甲南高校に御転任の際、岡山の寓居で撮られたものであります。池山寿夫様から特にいただきましたもので、お元気だつたお姿を御紹介させて頂けました。

御案内

毎月第一、二、三日曜午后一時半、一道会、毎月廿四日、午前午后、市内昭和区小桜町教西寺、法話会。

御案内

十月二十七日、日曜日。午后一時より一道会。

京都市右京区山田開町、浄住寺、榊原徳草師住。

京都駅から苔寺行きバス、終点下車。地蔵堂道を南へ約十五分。又は、新京阪、桂駅のりかえ、上桂下車。西へ約二十分。

定価一部　二十五円（送共）
半年　百五十円（送共）
一年　三百円（送共）

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　本田政雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所　慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光　第十五巻　第十号　昭和三十八年十月五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可